

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00640

研究課題名（和文）100場面会話による言語行動の地域差についての研究

研究課題名（英文）A study on regional differences of verbal behavior by 100 scene conversations

研究代表者

小林 隆（KOBAYASHI, Takashi）

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：00161993

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、言語行動の枠組みに従った100場面の「場面設定会話」を収録し、それに基づいて日本語方言における言語行動の地域差を明らかにしようとしたものである。これまで宮城県をフィールドとして培ってきた方法論を基に、全国の4地域（宮城・東京・大阪・大分）の会話収録で使用する100個の場面を選定し、場面設定の詳細も準備した。また、会話データを補完すべく、会話風に質問を組み立てた「擬似会話型面接調査」の方式を用い、宮城県気仙沼市で多人数調査を実施した。さらに、全国800地点で行った調査結果を整理・加工し、それを分析することで、言語行動の全国的な地域差を浮かび上がらせることに成功した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語行動の地域差の解明を目指すためには、まず、そのための資料的な基盤を整える必要があり、本研究はその点で一定の成果を挙げることができた。特に、言語行動の枠組みに基づく「場面設定会話」を収録し、それにより研究を展開する点には方法論的な独自性があると言える。また、言語行動の視点から体系的に設定された100場面は、今後の各地の談話資料収録においても役立つものであり、利用価値が高いと考えられる。さらに、研究成果として得られた言語行動の地域差についての知見は、新たに言語運用の方言学を切り拓くことに寄与するはずであり、社会的にはコミュニケーション不理解の原因の究明に役立つと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we recorded 100 scenes of "set-setting conversations" according to the framework of linguistic behavior, and based on them, we tried to clarify the regional differences in linguistic behavior in Japanese dialects. Based on the methodology cultivated so far in Miyagi Prefecture, we have selected 100 scenes to be used in recording conversations in four regions nationwide (Miyagi, Tokyo, Osaka, and Oita), and also prepared detailed scene settings. In addition, in order to complement the conversational data, we conducted a "multi-person survey in Kesenuma City, Miyagi Prefecture, using the method of "pseudo-conversational interview survey" in which questions were constructed in a conversational style. Furthermore, by organizing, processing and analyzing the results of surveys conducted at 800 sites nationwide, we succeeded in highlighting regional differences in verbal behavior across the country.

研究分野：方言学・日本語史

キーワード：言語行動 地域差 談話資料 方言会話 場面設定会話 擬似会話型面接調査 全国調査 言語的発想法

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 言語の構造面から運用面へと広がる学界の関心

従来の方言学では、音韻やアクセント、語彙、文法といった言語の構造面を対象とする研究が主流であり、その運用面についての研究が遅れていた。しかし、近年では、言語学・日本語学の研究動向の影響のもと、例えば、国立国語研究所(2006)『言語行動における「配慮」の諸相』、野田尚史・高山善行・小林隆編(2014)『日本語の配慮表現の多様性 - 歴史的变化と地理的・社会的変異』など、方言学の分野でも言語行動に対する関心が高まりつつある。方言学にとって、こうした運用面の地域差は今後切り拓くべき重要な課題である。

(2) 言語行動の地域差を解明するための資料的基盤の弱さ

音韻やアクセント、語彙、文法などの地域差について考察するための資料は、これまでの各地の記述調査や全国的な分布調査などによってかなり充実している。しかし、言語行動の地域差について知ろうとすると、一部の調査を除いて蓄積されたデータはかならずしも多いとは言えない。今後、言語行動の方言学を展開するためには、まず充実した資料の構築が求められる。共通語化による方言の衰退が著しい今日、その作業は急務であると言える。

(3) 言語行動の把握に適した談話資料作成のための方法論の停滞

言語行動の様相をより実態に近いかたちで把握するには、談話資料の作成がひとつの有効な方法と思われる。方言の談話資料は従来も作成されてはきたが、収録方式としては「自由会話」が主流であった。しかし、この方式はいわゆる雑談を内容とするため、言語行動の多様性を把握するには不向きであった。そこで、さまざまな種類の言語行動の観察が可能な「場面設定会話」による談話資料の充実が必要になる。

2. 研究の目的

本研究は、言語行動の枠組みに基づいて100場面の「場面設定会話」を収録し、それを主な資料とすることで、日本語方言における言語行動の地域差を明らかにしようとするものである。近年、方言学の関心のひとつは言語行動の側面に向かいつつあるが、従来の「自由会話」による談話資料は、言語行動の多様性の把握には不向きであった。そこで、これまで『生活を伝える被災地方言会話集』1~4で培ってきた方法論を軸に、全国の主要地域において、言語行動の枠組みに基づく100場面会話を収録する。そして、それらの比較・分析によって言語行動の地域差を解明したい。その際、補助的な方法として、会話の性質を取り入れるよう工夫した多人数面接調査の結果や、全国800地点に及ぶ地理的分布調査の結果を合わせ用いることで、言語行動の地域差を多角的に考察する。本研究の成果は、今後の言語行動の方言学にとって、基盤となる資料の構築と、基礎的な知見の獲得に役立つはずである。

3. 研究の方法

(1) 言語行動の枠組みに基づく100場面の設定

会話の収録にあたり、目的別に整理された言語行動の枠組みに基づき、100個の場面を設定する。その際、『生活を伝える被災地方言会話集』1~4を作成する際に構築した次の枠組みを修正して用いる。また、『生活を伝える被災地方言会話集』ではこの枠組みで167場面を設定し、会話を収録している。それらの中から各系のバランスを考慮して100場面を選定し、修正を加えつつ収録場面を決定する。言語行動の地域差は東北と関西に顕著な違いが見られ、関東と九州がその中間的な様相を示すと予想される。そこで、各地域の代表として、宮城・東京・大阪・大分の4地域を会話の収録地点として選定する。

(2) 疑似会話型面接調査などの実施

(1)の会話は少人数のため、結果に個人差が影響する可能性がある。そこで、会話風に質問を組み立てた「疑似会話型面接調査」を各地域10名の話者に行い、(1)の談話資料を補完する。また、全国800地点で実施済みの分布調査データベースを本研究に利用できるよう加工し、あわせて分析に用いる。

(3) 目的別言語行動の地域差の解明

(1)と(2)で作成した資料を総合的に分析することで、言語行動の地域差について明らかにしていく。特に、場面設定会話の特性を生かして、同一場面のデータを宮城・東京・大阪・大分の4地域で比較するという方法を取る。また、分析は当該の言語行動の中核をなす発話(「荷物運びを頼む」であれば依頼発話に当たる「この荷物を持ってくれませんか」の部分)を取り上げるのみでなく、談話論的な視点から、会話の展開の中で当該の言語行動の目的がどのように遂行されるかを明らかにしていく。

4. 研究成果

今回の研究で明らかになったことを、「言語的発想法」の観点から整理すると次のようになる。

(1) 発言性の地域差

「声かけ」の有無について見てみると、「依頼」の言語行動において、まず、買い物場面では

日本の中央部に当たる近畿、北陸・甲信越で他地域よりやや高い傾向を示す。特に大阪は、少額の会計への高額紙幣支払い時にもよく声をかけるという結果が現れた。また、郵便局でのしがき購入の際には、声をかける人の割合が100%に達する地域は北陸と近畿に集中している。さらに、「喜び」「落胆」の言語行動、すなわち、孫が徒競争で一等になって喜んだり、最下位になってがっかりしたりする場合、特に落胆場面で何も言わない地点は北海道・東北に目立つ。

(2) 定型性の地域差

新年のあいさつと不祝儀のあいさつについて見ると、これらの「あいさつ」の定型性は近畿や関東で高く、北海道・東北、甲信越、九州・琉球で低い結果が出ている。大局的に見て、この傾向は京都、東京を中心にした三辺境分布としての把握が可能である。また、病院の受診を促すという「勧め」の言語行動では、近畿を中心に「そりゃあかん」や「えらいこっちゃ」といった定型的な表現が多いのに対し、東日本ではそうした定型化の傾向を確認できる現象は見当たらず、より直接的な命令形とさまざまな表現を組み合わせ用いている。

(3) 分析性の地域差

まず、ゴミ出しの違反や約束の時間への遅刻に対する「非難」の言語行動では、近畿にそのような傾向が強いという従来の見解に対して、近畿も一筋縄ではいかず、直接的な不利益がない場合や相手が疎の関係にある場合は非難に消極的な姿勢が現れた。また、のど自慢をめぐる「励まし」「祝い」「なぐさめ」の言語行動では、近畿が必ずしも発言性が高くなく、発話者が恩恵などに直接関与しない場合には積極的な発言が控えられ、場面や相手によって発言性の傾向も変動する可能性があることが考えられた。分析性が発言の内容だけでなく、発言するか否かの選択にも関わるという点は重要であり、それを左右する要因・システムを明らかにすることが今後の課題となろう。

(4) 加工性の地域差

東日本は直接的な命令形の使用が目立つという点は「加工性」の問題として注目される。「勧め」の言語行動では、西日本ではさまざまな表現がとられ、よりレトリカルな方向への発達が志向されているのに対し、東日本では一方的に話し手の見解を述べるにとどまる傾向が見られる。「非難」の言語行動においても、東北では相手の行動統制に関わる要素が比較的多く、罰や不利益の提示など容赦のない言い方も観察される。また、荷物持ちの「依頼」と「受託」においては、受け手が頼み手に配慮する際、東北では頼み手の気持ちや行為を制限する直接的な表現が目立つのに対し、受け手が負担の軽さを装い、間接的に頼み手の恐縮感を和らげる「偽装的表現」が中部・中四国に多く、謙遜的な表現や相手の努力を褒めるような言い方も主に中部以西に見られる。さらに、おつりの不足を店の人に「確認」する言語行動においては、近畿では、単一の働きかけだけでぶっきらぼうに済ます言い方が比較的少ないことや、短めの言語行動においても間接的な働きかけが用いられる傾向がある。ただし、具体的な言語表現のレベルで見ると、ストレートな言い方が選択される傾向もあり、それが時には働きかけの婉曲さを補うインパクトとして機能している。こうした加工性と直接性のメリハリによる重層的な表現機構は、近畿の言語行動が単に加工性が高いと言うだけでは済まされない問題を提起する。

(5) 客観性の地域差

野菜を分けてやったり荷物を持ってやったりする場合の「申し出」については、恩恵を受ける側が「よかった」と喜びの声を上げる傾向が東北に見られる。東北に主観的な言い方が目立つことは「非難」の言語行動にも観察されるが、一方、近畿では感情的な要素を含めず端的に伝えたり、望ましくない事態に及んだ事情を尋ねたりするなど、客観的な傾向が見受けられる。また、「あいさつ」においては、日本の中央部では儀礼的な対応がとられやすく、周辺部ほど主観性の勝った情動的な対応がとられやすい。さらに、荷物持ちの「依頼」「受託」の言語行動も、頼む側が状況説明を行う際、東日本では、単に荷物が「重い」と言うだけでなく、「大変だ」「だめだ」「一人では持てない」のように自身の窮状を相手の心情に訴える主観的説明を行う傾向が見られる。この「大変だ」類の使用は、受託側にも観察することから、東日本では主観的な発話要素の交換・相互使用によって、会話の現場に話者同士の共感を生み出していると考えられる。さらに、感動詞の頻繁な使用は、主観性の強いものの言い方のひとつの特徴と判断されるが、この点に関して、東北では「依頼」の際、相手に助けを求めざるを得ないほど自分が困っていることを、率直に驚きの声を上げて表現する傾向があり、この場合、受託側にも感動詞の使用が見られることから、東北では、感動詞が話し手と聞き手の共感の形成に積極的に機能していると予測される。

(6) 配慮性

まず、命令表現の使用に一定の地域差が確認された。「申し出」の言語行動では命令表現の使用は、日本の周辺地域にまとまりがある。また、「勧め」の言語行動では、命令形の使用が東日本に特に多く、関東を挟むように、東北南部と中部に分布がある一方、九州や沖縄には少ないかほとんど見当たらない。「非難」についても、東北では命令的な言い方が現れる点が注目される。命令が話し手から聞き手への一方的な要求の提示であり、配慮性に乏しい表現であるとするれば、相手の意向を尋ねる質問は、聞き手への配慮が含まれた表現であると考えられる。「申し出」の言語行動では、そうした質問表現の使用が西日本にやや多いことが見て取れる。「勧め」においても、質問表現が近畿とその周辺部に多く観察される。「非難」においても、特に遅刻場面では相手の事情について尋ねたり推測したりする傾向が近畿に認められる。依頼の「受託」においても、相手の望むことを具体的に聞き出す「意向確認類」が近畿を中心に認められるのに対し、東北や九州ではあまり使用されていない。

次に、発話要素の組み立てに関して地域差が見られた。「依頼」の言語行動における「恐縮表明」と「状況説明」の発話要素の出現順序について、「恐縮表明」を先に立てる傾向が近畿を中心とした日本の中央部で強いものに対して、東北や九州といった周辺部の地域では、「状況説明」を前に出す傾向が見られる。類似の傾向は、少額の買い物で一万円札を出す場面にも現れている。さらに、連絡を「伝える」言語行動でも、発話の冒頭で「謝罪（恐縮表明）」を行う例が東北・関東で少なく、西日本に多いことが明らかになった。発話要素の順序については、「依頼」時の「ちょっと」の位置について、東日本では発話の途中が多いのに対し、西日本では発話の開始部であることが多い。すなわち、西日本の「ちょっと」は、開口一番、相手にかかる負担が過大でないことを示すと同時に、そうした依頼を切り出すぶしつけさを回避しようというねらいがあると考えられる。

以上のような言語行動の地域差に関する発見はこれまでにない重要な成果であり、これからの研究の基礎的な知見となり得るはずである。今後は、対象とする言語行動の種類や調査・収録地点を増やしていくことで研究を深化させたいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小林隆	4. 巻 98-6
2. 論文標題 発話態度の地域差 - 自己と話し手、自己と他者 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 3-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 椎名渉子	4. 巻 114
2. 論文標題 配慮の発想と運用	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 表現研究	6. 最初と最後の頁 38-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林隆	4. 巻 1
2. 論文標題 言語行動の全国調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国調査による言語行動の方言学	6. 最初と最後の頁 3-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林隆	4. 巻 1
2. 論文標題 依頼・受託の言語行動－配慮性と主観性の観点から－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国調査による言語行動の方言学	6. 最初と最後の頁 29-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林隆	4. 巻 1
2. 論文標題 言語行動の地理的傾向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国調査による言語行動の方言学	6. 最初と最後の頁 327-338
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林隆	4. 巻 4
2. 論文標題 オンラインによる感動詞調査の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開	6. 最初と最後の頁 8-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤亜実	4. 巻 1
2. 論文標題 喜び・落胆の地域傾向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国調査による言語行動の方言学	6. 最初と最後の頁 217-250
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 椎名渉子	4. 巻 1
2. 論文標題 不利益を被る場面における非難の言語行動の地域差—東北と近畿に注目して—	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国調査による言語行動の方言学	6. 最初と最後の頁 165-192
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中西太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 新年のあいさつ・不祝儀のあいさつの定型性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国調査による言語行動の方言学	6. 最初と最後の頁 301 - 324
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中西太郎	4. 巻 32-6
2. 論文標題 場面設定会話と自由会話の特徴の比較 『生活を伝える方言会話』, 『COJADS』の共通語訳テキストを用いて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 計量国語学	6. 最初と最後の頁 346 - 356
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫛引祐希子	4. 巻 1
2. 論文標題 連絡を伝える言語行動の地域差－話し手と聞き手の関係性に注目して－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国調査による言語行動の方言学	6. 最初と最後の頁 251-278
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田美香	4. 巻 20
2. 論文標題 九州4地点の依頼談話における配慮表現と積極的言語行動 九州における方言談話の特徴と分布	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国立国語研究所論集	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田美香	4. 巻 1
2. 論文標題 「申し出る」と「受け入れる」 恩恵表現と機能的要素から見る分布の特徴ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国調査による言語行動の方言学	6. 最初と最後の頁 97-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林隆	4. 巻 1
2. 論文標題 依頼会話に見られる特徴	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生活を伝える方言会話 - 分析編 -	6. 最初と最後の頁 203-223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林隆	4. 巻 3
2. 論文標題 依頼と受託の言語行動	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開	6. 最初と最後の頁 31-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤亜実	4. 巻 1
2. 論文標題 会話収録の方法についての実験的検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生活を伝える方言会話 - 分析編 -	6. 最初と最後の頁 283-304
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 椎名渉子	4. 巻 1
2. 論文標題 非難の言語行動の特徴 - 要素とその出現傾向の場面差に着目して -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生活を伝える方言会話 - 分析編 -	6. 最初と最後の頁 241-262
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中西太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 出会いのあいさつの定型性と反復性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生活を伝える方言会話 - 分析編 -	6. 最初と最後の頁 181-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫛引祐希子	4. 巻 1
2. 論文標題 『生活を伝える被災地方言会話集』の映像が持つ可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生活を伝える方言会話 - 分析編 -	6. 最初と最後の頁 305-319
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 澤村美幸	4. 巻 1
2. 論文標題 勧誘の断り方の特徴 - 関西との比較を軸に -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生活を伝える方言会話 - 分析編 -	6. 最初と最後の頁 225-239
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小林隆
2. 発表標題 語用論的方言学の構想（シンポジウム「語用論的方言学への招待」）
3. 学会等名 第24回日本語用論学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 椎名渉子
2. 発表標題 語用論的方言学の資料（シンポジウム「語用論的方言学への招待」）
3. 学会等名 第24回日本語用論学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 椎名渉子
2. 発表標題 配慮の発想と運用（シンポジウム「方言表現論の最前線」）
3. 学会等名 第58回表現学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中西太郎
2. 発表標題 言語行動の方言学（シンポジウム「語用論的方言学への招待」）
3. 学会等名 第24回日本語用論学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 櫛引祐希子
2. 発表標題 言語行動の地域差から日本語の「よろしく」を再考する
3. 学会等名 第112回日本方言研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松田美香、奥野美咲、甲斐麻奈未、川口玲奈、中本学
2. 発表標題 野津原方言調査会と学生との学術的交流機会の創出 - 『野津原方言集』20巻の電子テキスト化と方言研究を通じて -
3. 学会等名 おおいた地域連携プラットフォーム主催 2021年度地域の課題解決事業成果報告会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林隆
2. 発表標題 方言地理学の課題 - 佐藤亮一氏の業績をもとに -
3. 学会等名 LAS科研2020年度末研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林隆
2. 発表標題 言語行動の地理的傾向
3. 学会等名 第1回方言語用論研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤亜実
2. 発表標題 喜び・落胆の言語行動の地域差 孫の徒競走を観戦する場面を対象に
3. 学会等名 韓国日語日文学会2020年冬季国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤亜実
2. 発表標題 孫を応援する場面における言語行動の地域傾向 喜び・落胆に着目して
3. 学会等名 第2回方言語用論研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 椎名渉子
2. 発表標題 子どもに対して用いられる感動詞の地域差
3. 学会等名 中部日本・日本語学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 椎名渉子
2. 発表標題 不利益の有無からみる非難の言語行動の地域差
3. 学会等名 第2回方言語用論研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中西太郎
2. 発表標題 定型性から見た地域差 新年のあいさつ、不祝儀のあいさつを題材として
3. 学会等名 第1回方言語用論研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 櫛引祐希子
2. 発表標題 「よろしく」をめぐる言語行動の地域差
3. 学会等名 第3回方言語用論研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 澤村美幸
2. 発表標題 「お客に帰ってもらおう」言語行動の地域差 東北と関西との比較
3. 学会等名 第3回方言語用論研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松田美香
2. 発表標題 可能の意味区分の全国分布から何がわかるか
3. 学会等名 国立国語研究所シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア 日本の言語・方言の対照研究を中心に」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松田美香
2. 発表標題 大分県3地点の依頼場面の談話分析
3. 学会等名 方言文法研究会研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松田美香
2. 発表標題 大分方言
3. 学会等名 大分市主催「おおいたナイトスクール」ふるさと知ろう科講義（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 東北大学方言研究センター	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東北大学大学院文学研究科国語学研究室	5. 総ページ数 105
3. 書名 被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開4	

1. 著者名 大分学研究会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 佐伯印刷株式会社	5. 総ページ数 367
3. 書名 大分学事始2（大分学研究叢書4）	

1. 著者名 小林隆編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 356
3. 書名 全国調査による言語行動の方言学	

1. 著者名 東北大学方言研究センター	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東北大学大学院文学研究科国語学研究室	5. 総ページ数 93
3. 書名 被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開4	

1. 著者名 小林隆・今村かほる編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 290
3. 書名 実践方言学講座3 人間を支える方言	

1. 著者名 東北大学方言研究センター	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 864
3. 書名 生活を伝える方言会話 [資料編・分析編]	

1. 著者名 東北大学方言研究センター	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東北大学大学院文学研究科国語学研究室	5. 総ページ数 70
3. 書名 被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開 3	

〔産業財産権〕

〔その他〕

東日本大震災と方言ネット https://www.sinsaihougen.jp/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松田 美香 (MATSUDA Mika) (00300492)	別府大学・文学部・教授 (37502)	
研究分担者	櫛引 祐希子 (KUSHIBIKI Yukiko) (10609233)	大阪教育大学・教育学部・准教授 (14403)	
研究分担者	佐藤 亜実 (SATO Ami) (20829197)	東北文教大学短期大学部・その他部局等・講師 (41503)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中西 太郎 (NAKANISHI Taro) (30613666)	跡見学園女子大学・文学部・准教授 (32401)	
研究分担者	椎名 渉子 (SHINA Shoko) (70765685)	名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授 (23903)	
研究分担者	澤村 美幸 (SAWAMURA Miyuki) (80614859)	和歌山大学・教育学部・准教授 (14701)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関